

「いっぽいっぽ」2020年度活動報告

文責：前尾 留美子

岐阜市生活福祉課からの委託をうけ、2016年7月1日に開設された「岐阜市社会的居場所“いっぽいっぽ”」は丸4年を過ぎ、5年目に入った。

さまざまな事情や背景を抱えながら、社会に一步踏み出せないで孤立してしまった人たちが、社会参加への第一歩を踏み出す機会となる施設として運営、活動をしてきた。

『ひとりじゃなかった』、『みんなと一緒にいると元気になれる』、『安心できる』、『失敗でき、何度でもやり直しができる』場所として、また、他の仲間たちとの関係性のなかでいろいろな考え方、多様性を知ることから孤立感の解消、自分を認めることができる場所としての機能を果たせるよう対応してきた。

また、今年度は 新型コロナウイルスの感染拡大防止という難題に対峙しなければならない一年でもあった。

「緊急事態宣言」の発出時には“いっぽいっぽ”を閉鎖すべきかどうかを考えた。

しかし、家族と一緒にいることがつらい人、ここに来ることしか選択肢のない人など、どうしても“いっぽいっぽ”が必要だ！という人たちのため、また、コロナ禍だからこそ必要だというニーズにも応えて“いっぽいっぽ”の扉を開いておくと決めた。

入口には「～利用自粛のお願い～」の張り紙をし、室内の消毒、一日中の換気、マスク着用、検温、手指消毒、3密を避けるなど感染対策をしながらの開設となった。

また、同様の理由から、継続して行ってきた、「みんなでご飯」は、何回か中止せざるを得なかった。なお、「おじ散歩」「クラフト教室」などは状況をみながらの実施となった。

今年度の利用者累計402人、見守り対象者20人、ボランティア132人、見学・体験者82人合計1027人。

これらの数字がどんな意味を持つのか。感覚的には、ニーズはあるにもかかわらず、支援にむすび付いて居ない人が多く存在していると実感している。制度の運用や手続きの煩雑さ、利用者の課題に寄り添う支援姿勢等が支援にむすび付かない、いわば「壁」ではないかと憂うものである。生きづらさを抱えながらも、本居場所に届かず孤立している人が、もっともっといるとすれば、そんな人たちと出会える機会や手段を新たに考え、実行していかなければならないと痛感する。さて、新たな手段とは何なのか？これからの課題である。

学習支援室いっぽ 2020年度活動報告

学習支援室いっぽは、よりそいネットワークぎふ主催の学習支援室として設立され、ぎふ学習支援ネットワークに所属する形で2019年の12月から開始した。毎週木曜日の 18時～21時に、社会的居場所いっぽいっぽを活動場所にして活動している。

2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため5月は休止期間としたが、感染防止対策や時短開催を実施しながら学習支援室の運営を続けてきた。また、登録生徒3名のうち中学3年生1名が高等学校に進学した。

参加している子どもの中には経済的に困窮した家庭の子どもも存在し、ぎふ学習支援ネットワークに寄付された食料や生活物資の支援を各家庭に行った。

学習支援室としての実績や経験の浅い中、子ども達にどのように関わって、どのような役割を果たしていけるのかを、スタッフや関係者の方々と試行錯誤しながら活動した1年間となった。

就労準備支援事業

23人の登録があるが、新規の登録（相談機関からの紹介）はなく、既に働いていたりして「見守り」という状態の人も多く、現行で来る可能性があるのは6名のみ。

多様な回路（就労可能性が高い人や、企業での体験など）があるうちのひとつという位置づけであり、今後登録者が増えていくことは見込めなさそう。

これまでは、「支援調整会議」を経ずに直接つながれた生活保護受給者が多かったが、サポートセンター経由となると、なかなか利用が難しくなる。現状は、沢渡さん次第という状態。

岐阜市子ども見守り宅食支援事業

実施期間：令和 2年 9月 28日～ 令和 3年 3月 12日

見守りを実施した子どもの実人数：51人

配達した延べ食数：1,779食

配達を担当したスタッフの実人数：8人

食事の調理場所（外部に委託した場合は事業者名も記載してください。）

住所	事業者名	連絡先
岐阜市則武中2丁目9-8	有限会社 おくだ	058-231-7448
岐阜市栗野東5丁目244番地	コミュニティCaféわおん	058-237-1661
岐阜市茜部神清寺2-94-1	和風喫茶 よしの	090-5031-6605
岐阜市茜部新所3丁目85-1	糴豆のおもい	058-213-5517

①配達を開始する前に見守り担当者と打ち合わせをした。

（9月27日・11月2日・1月4日等）

②配達を新たに開始する時は必ず責任者(原)が同乗して利用者さんに挨拶や説明をしたり、担当交代の時も同様に新旧が一緒に伺い説明と紹介をした。

③宅食する家庭の内2件（№3010及び№2021）は責任者原から面談ないしは電話で安否確認等をした。

④受託3団体事業実施の為の連携・統括担当者として若岡昌樹氏に就任していただき、その費用は3団体で分割した。

⑤№1053の家庭が子ども一人で暮らしていた時、見守りとは別にお弁当を配架した。

中濃圏域ひきこもり居場所事業

●家族の居場所：4回・延べ37人（実人数13人）

中濃圏域での家族会開催は、以前から待たれていた。そのため、家族会には、初回から一定の参加者があった。しかし、私たちの把握できている範囲は限定的であり、中濃はとて広いと、市町村によつての空気感や温度差もある。今後は、丁寧に市町村を訪問して協力や告知の依頼をしていく必要があると感じている。

2020年度は、コロナ感染の拡大に伴い、公共施設が休館されたりしたことで、家族会そのものの休止を余儀なくされるなど、そのための対応(休止の連絡や別途会場の確保等)に追われ、告知、お誘い、会の内容の充実など、本来の準備が十分にできなかったところが残された。

●本人の居場所：2回・延べ5人（実人数3人）

中濃圏域における「本人の居場所」は、事前の足掛かりがほとんどない中での開催となった。もちろん、これまでにつながりのあった人も何人もいたが、いずれも交通手段がネックとなって参加には至らなかった。このことは、次年度も課題となり、開催の場所等の検討も必要になると思われる。

さらに、今年度は、最初からコロナ感染の拡大に翻弄され、初回と二回目となった12月、1月は会場休館にともなつて開催すらできなくなった。しかも2月以降の会場の使用の可否も見通せない状況で、苦戦が強いられた。急ぎよ、可児市にある広域通信制高校の施設を使用させていただくことになったが、次年度もしばらくはそちらの会場を使わせていただくことになる。

ただ、通信制高校が十人ほど卒業後に行き場を失つてひきこもっているという現状もお聞きし、その方面からのアプローチの必要性があることを気づかされた。

西濃圏域ひきこもり居場所事業

●家族の居場所：5回・延べ56人（実人数24人）

西濃圏域での家族会は、すでに5年ほどの経験があり、その点では一定の認知がされている中での「家族の居場所」(家族会)開設であった。

西濃の家族会は、準備期間中であつた8月頃から当事者の参加が見られるようになり、そのため運営を担当しているポポロからも当事者が参加することで、12月開設予定の「本人の居場所」につなげたいねらいがあつた。これによつて、参加されるご家族の期待も自然と高まつた。

これは、親と本人との会話が家庭の中で成立しないケースが少なくない中で、疑似親子というか、斜めの親子関係での対話ができることが分かつた。まだ成果の検証には至らないものの今後に期待したい。

また、大垣市の障害福祉課の職員が交代で参加されており、行政との連携も今後、強めていきたい。

●本人の居場所：3回・延べ23人（実人数10人）

家族会が、すでに5年ほど継続してきた経験から、当事者本人の居場所開設は家族の中

からも強い要望がでていた。

家族会には、2020年夏ごろから当事者の参加がみられ、家族会の中での発言が、参加家族にとってもとても参考になるものであった。

また、ポポロでは、2018年、2019年と2年連続の当事者のための「居場所交流」を大垣市で開催してきた。加えて2016年から月一回のひきこもり女子会「ラルジュ」が継続して開催されてきており、今回の「当事者居場所」開設の土壌は徐々にできつつあった。

2020年12月からの「本人の居場所」は、コロナ感染拡大の影響もあり、十分な準備ができない中での開催ではあったが、ポポロからの当事者に加えて新しい参加者も開催することになった。家族会の参加者の中にも、本人に本人の居場所への参加の誘いの声掛けをするようなことも見られた。

新型コロナウイルス対応緊急支援助成 ～社会的脆弱性の高い子どもの支援強化事業～

「生活困窮世帯へのよりそいステーション整備事業」 報告担当：若岡

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの助成を受けて（資金基はJANPIA休眠預金活用事業）

2020年10月～2021年9月までの1年間実施

【事業概要】

よりそいネットワーク参画10団体で、岐阜圏域において、自治体や企業・民間等から提供される食材や生活用品などを収集・管理し、それらの生活支援物資を必要としている生活困窮世帯へと配布していくフードバンク事業を拡大した「よりそいステーション」の体制を構築していく。新型コロナウイルスの感染拡大により、生活困窮世帯からの緊急SOSが相次いでいる。それらの要望に対し、これまでは個別団体・個々人が個別の対応を行ってきたが、今後の経済不況の持続や感染拡大第二波の到来を見据え、物資供給・配布・相談対応など、生活支援物資のシーズとニーズのマッチング体制を整備していく。

【半年の総括】

事業開始の10月段階で、当初予定していた6ステーションから更に拡大して、岐阜・西濃地域に10ステーションを開設。各ステーションの地域性や特徴を生かし、月～土曜日まで毎日どこかで、困難をもっている子ども・若者・保護者に対して「よりそいステーション」が開設できている。この他にも食糧支援は毎日実施できているが、団体間の情報共有が十分とは言えないので、後半は更に連携を密にし、課題の見える化をしていく。リーフレットが完成したので広報活動にも力を入れ、より多くの困窮世帯へ情報発信していく。食糧提供などでの公的機関等と連携も強化し、覚書締結などを行い事業継続を図る。

【1年後の目標値と進捗状況】

岐阜圏域に、「よりそいステーション」を整備し、各地域の生活困窮世帯がステーションに集い、安心して地域社会で生活できる状態

- ①「よりそいステーション」6か所➡よりそいステーションは10か所開設。
- ②「よりそいステーション」毎週1回以上➡各ステーションでコロナの緊急事態宣言中の特殊辞事態以外は週1～週3日開設している。また、電話相談を行っているステーションもあり、ステーション開設時間も日中や夜間等多岐にわたっている。
- ③「よりそいステーション」相談児童生徒300人・保護者300人
 ➡相談児童300人目標は、リーチ数5カ月集計1573人（10～2月集計）、2020年ネット数293人（10～12月）、大人は、リーチ数5カ月集計1269人（10～2月集計）2020年ネット数184人（10～12月）で、半年としては概ね達成できている。時間外のスOS相談なども多く、これに対する対応がステーション任せになっている。相談と毎回の食糧支援だけでは生活困窮の根本的解決にはならないため、支援と同時に公的機関などにつながる努力が必要
- ④食料品・生活必需品などの受益者300世帯➡食料品の受益者も③と重なる部分も多く、生活困窮の相談者に関しては、随時食糧支援を行っているので250世帯達成。
- ⑤食品提供連携5団体➡食品提供団体は、農家からの米や野菜の提供が多く半年で18団体となった。岐阜市やフードバンクぎふ等の連携を強固にする。生協との連携も模索中。

【事業計画と進捗状況】

以下の活動5点を年間計画にあげた。

- ①よりそいステーション6か所の整備
 ➡ステーションを6か所から10か所に増設して、岐阜・西濃地区で展開している。ステーションごとの地域性や団体の特徴を尊重し、児童生徒向けに夜の学習支援室の傍らで・引きこもり若者向けに平日の日中に・電話相談中心に夜間に・保護者も含めた食支援を中心に土曜日に・地域の困りごとやお弁当提供で平日夜に等、ステーションごとの独自性を担保して様々に展開している。
- ②食品提供団体5団体との連携
 ➡コストコ（毎週）・サカエパン（毎日）・生協・フードバンク（不定期）・岐阜市防災課・福祉課・上下水道課（入れ替え時期）・市民病院（入れ替え時期）・子ども食堂ネットワーク（不定期）と連携。その他農家等から不定期に米や野菜などが提供される。覚書などで連携を強化し明確化する。
 その他の団体：龍の瞳・楽農楽人・大野食糧（米・雑穀米1トン）・大野町の農家複数・製麺所・社協・杉浦さん知人の野菜農家・若岡知人の寄付者（米2軒）・タカトモ農園・以上18カ所以上
- ③「よりそいネットワーク・よりそいステーション」のリーフレット作成と配布
 ➡リーフレットが完成。岐阜県子ども家庭課からも、国が打ち出したコロナ禍の生活困窮者への追加支援策の検討で当団体への問い合わせがあり、リーフレットを提供した。今後、連携している岐阜市や多くの公共施設等にリーフレットを配布し、周知を図る。
- ④生活困窮世帯への食糧支援
 ➡食糧支援は、必要に応じて全ステーションで実施しており、お米だけでも2トン以上、缶づめ4000缶、カロリーメイト6000箱、アルファ化米6000食、カップ麺1600個、サカ

エパン1680kg、その他野菜なども月に何回も各ステーションにて収集・配架している。

⑤生活備品・制服などの収集と加配

■制服の収集・提供も寄付の呼びかけと、要望者へ加配すべく保管している。生活備品で、冷蔵庫や洗濯機などの大型家電の要望も半年で8件以上もあり、本助成金を利用して食品や家電の緊急時の対応に備えて保管する倉庫も借りることができた。岐阜市福祉課生活困窮窓口からの緊急依頼もあり、即時対応できるシステムができつつある。

【メディア掲載】

- ・岐阜新聞（2020.11.16）「制服問題」
- ・岐阜新聞（2021.1）「引きこもり支援」
- ・岐阜新聞（2020.12.16）「あしながサンタと中川代表の意見」
- ・毎日新聞（2020.11.17）「家族支援」
- ・県社協定期刊行物（2020.11.）「ボランティアのひろば」
- ・「FMわっち」でコミュニティサポートスクエアの杉浦代表が毎週水曜日18:10～18:30「not aloneわおん」コーナーで宣伝・紹介・イベント告知等（3年間実施している番組）。岐阜市の文化施設メディアコスモスで11月8日に「not alone day」フードドライブも実施
- ・その他、10ステーション団体の独自事業等での新聞掲載や定期刊行物等は多数。

【東日本大震災10年】コロナ禍、食料届け寄り添う 生活支援に力、家庭へ配達

<https://www.gifu-np.co.jp/news/20210317/20210317-52646.html>

【東日本大震災10年】5歳で岐阜へ避難、同じ仲間との週末...心許せた居場所

<https://www.gifu-np.co.jp/news/20210313/20210313-52138.html>

[東日本大震災から10年 岐阜に避難の中学生ら2時46分黙とう]

<https://www.gifu-np.co.jp/news/20210312/20210312-51774.html>